自転車を漕ぐ●水口奈津子

朽ち果てしベンチに育つホソウリゴケ午後の日差しにふくらみを増す
消しゴムの角がすっかり丸まってキンモクセイが香りはじめて
駅前に迎えの父はもういない秋の虫すだく一樹の立てり
まだ踏まれていない銀杏拾わんと屈むわが背を雲が見ており
虫食いの桜紅葉の散る真昼いちまいいちまいまなかいを過ぐ
飲み終えし水筒の中にわれを見るかなしみ深き眼ありたり
母の名を貼りたるままに母の杖立て掛けられて月光を浴ぶ
吹雪く川面に五羽の六羽の水鳥の流されており水脈すぐに消ゆ
水滴はつぎつぎ生まれ思わざる速さに形に落ちてゆくなり
吾の姿見えねばいつも泣きていし娘待ちおり雪の駅舎に
強引に今日を終了させるためうす紅色の錠剤含む
ウイルスの感染ついに告げらるる夢より覚めてだれにも告げず
うずくまりきのうのわたしと話し合うホテイアオイを突っつきながら
室外機のホースより流れ出る水の聞こえなければひとりごとなり
むらさきの蔓をひらいてかけてみる母の眼鏡はまだ度の強し
昨夜泣きしこころあっさり手放しぬ開店前の返却ボックス
ビニールシートを押さえる石の大きあり小さきのありて役割をもつ
味のないガム噛み続けていたかったある朝雨は上がっていたが
父の乗り母も乗りたるしろがねの自転車を漕ぎ季節をまたぐ
蒼空に深き刺し傷ゆっくりと白き機体は移動してゆく